令和５年度

連携活動記録報告書

ＶＯＬ．１４

令和６年３月

山形大学附属学校

目 次

はじめに ・・・・ 1

Ⅰ 連携活動の記録

令和５年度 附属学校園配置のコーディネータの成果と課題 ・・・・ 3

令和５年度 附属学校園「まつなみ学習支援室」の成果と課題 ・・・・ 6

令和５年度の活動を振り返って ・・・・ 7

１ 幼小中連携

（１）幼小連携 ・・・・１５

（２）幼中連携 ・・・・１６

（３）小中連携 ・・・・１８

２ 特別支援学校連携 ・・・・１９

Ⅱ 山形大学附属学校研究・連携推進委員会規程 ・・・・２５

Ⅲ 資料

附属学校研究・連携推進委員会規程第７条に定める

部会に関する申し合わせ ・・・・２９

附属学校研究・連携推進委員名簿 ・・・・３１

はじめに

山形大学附属学校園では、4 校園相互の連携を強化し、校種間の円滑な接続と相互交流による一貫性の高い教育を行うことを目的として、「山形大学附属学校研究・連携推進委員会」の下に、「共同研究推進部会」・「幼・小・中連携部会」・「特別支援連携部会」の 3 つの部会を設置しています。「共同研究推進部会」の活動については『大学と附属学校園の共同研究報告書』として報告しています。本報告書は、令和 5 年度の「幼・小・中連携部会」と「特別支援連携部会」の活動の記録をまとめたものです。

山形大学附属学校園では、子どもたちの交流活動や連絡会、研修会などを通じて、教員が互いの教育現場を参観し合い、意見や情報を交換しています。その中で、各校園の教育目標に応じた特徴を持つ教育実践に基づいて、附属学校園としての新たな連携の在り方を意識した教育方法の検討に取り組んでいます。また、山形大学附属学校園には、特別支援教育コーディネータとメンタルケア・コーディネータ（平成 23 年度から）及び英語教育コーディネータ（平成 27 年度から）が配置され、「まつなみ学習支援室」（平成 24 年設置）とともに教育支援を行ってきました。これに加えて、令和 5 年度に教育情報化推進コーディネータを新たに配置し、教育活動の情報化を進めているところです。附属学校という特性を活かして、4 校園が多面的に連携した教育実践の追究に取り組んでいます。

山形大学附属学校園は、山形県教育委員会の「探究型学習推進プロジェクト」の推進協力校になっています。それぞれの校園での学びは、連続的につながっていくものとして捉える必要があります。幼稚園での「遊び込む教育」が子どもたちの探究活動の基礎となり、小学校での探究的な学びにつながっていきます。そして、小学校で育まれた地域に根ざした探究的な学びの姿勢が、中学校では視野を広げながら、自分が関心をもった対象を深く理解していく学習へと展開されることになります。さらには、高等学校や大学を学びの場とする、主体的で探究的な学習者として成長していくことが期待されています。

また、困難を抱えがちな子どもたちの支援においても、インクルーシブ教育の観点から附属学校全体で子どもたちの豊かな成長を促すしくみを構築することも求められています。

このような課題への取り組みは、公立学校のモデルとして全国の国立大学附属学校に要請されているものです。山形大学附属学校における連携活動が、単発的な交流活動に止まらず一貫した教育理念に支えられた実質的なものになるよう、今後も 4 校園の連携の在り方を模索していくことが大切だと考えています。

本報告書をご高覧いただき、忌憚のないご意見やご要望をいただければ幸いです。

令和 6（2024）年 2 月

山形大学附属学校運営部長　　三浦　登志一

Ⅰ　連携活動の記録

令和5年度　附属学校園配置のコーディネータの成果と課題　その１

附属小校長　林　敏幸
メンタルケアコーディネータ（中学校籍　教諭）　千葉　久美子
特別支援教育コーディネータ（特別支援学校籍　教諭）　藤本　沙織

１　配置のねらい

附属学校園の連携を強化し、円滑な接続と相互交流による一貫性の高い教育を行う。

◇教育相談と特別支援教育にける校種間の連携及びその一貫性の推進
◇附属学校園で特別支援を必要とする幼児・児童・生徒への支援の充実と体制整備の推進
◇附属学校園で心の問題を抱える幼児・児童・生徒への支援の充実と体制整備の推進

２　主な職務

◇幼小連携、小中連携における継続した支援・指導の中核
◇該当する幼児・児童・生徒への直接の支援・指導
◇学級担任や教科担任、養護教諭への専門性を生かした支援
◇各校園の教育相談担当者・特別支援コーディネータ・養護教諭との連携
◇まつなみ支援室における支援員への専門的な助言及び教職員の資質向上を促す研修実施

３　今年度（配置13年目）の基本的な考え方

【目　標】
◇早期支援の立場から幼稚園における支援や適正な就学指導に生かす機能強化を図る。
◇各校園でコーディネータおよびSCを積極的に活用した組織的な支援体制の充実を図る。
◇個に応じた支援のあり方（当該児童・生徒または保護者、担任支援も含む）を探究する。
◇年齢に応じた発達課題を整理し、幼から中までの12年間継続して課題解決を図る。
◇まつなみ学習支援室の支援員を中心に、別室での学習や取り出し指導の充実を図る。

【役　割】
◇附属学校園の課題を把握し、各校園の担当者と一緒に校園間をつなぐ。
◇各校園の担当者と連携し、各校園の課題解決に向けて指導及び支援を行う。

【具体策】
◇各校園の状況を把握し、幼児・児童・生徒の情報をつなぎ、一貫性のある指導・支援を行う。
◇SCとの連携を密にしながら専門的な情報を収集・整理し、各校園の教員への情報提供及び研修等を通して指導する。

４　今年度の成果（〇）と課題（▼）

〇コーディネータ及び支援員が幼稚園と小学校の両方に勤務し、幼児の実態把握と情報共有を丁寧に行うことで、幼・小をつなぐ指導・支援のあり方について連携することができた。
〇学級担任と日常的に情報共有を行い、支援計画に基づきソーシャルスキルトレーニング（SST）等を定期的に実施することができた。
〇状況に応じてコーディネータやSCも含めたケース会議を適時開催することで情報共有が図られ、その後の具体的な支援のあり方につなげることができた。
〇生徒や保護者を対象に、SCの専門性を生かした講話を行うなど、心の安定や安心感につながる支援を行うことができた。
▼小学校のまつなみ支援室および中学校の学習室を利用する児童・生徒が増加し、一人一人に応じた適切な支援を十分に実施できないときがあった。今後は、支援体制のあり方を検討し、さらに充実した支援に努めていきたい。

令和5年度　附属学校園配置のコーディネータの成果と課題　その２

附属小校長　林　敏幸
英語教育コーディネータ（附属小学校籍　教諭）　佐藤　大将

１　配置のねらい

附属学校園間の連携を強化し、円滑な接続と相互交流による一貫性の高い教育を行う。

◇グローバル化に対応した教育環境づくりの推進として、小学校における英語教育の充実強化、中学校における英語教育の高度化に対応する。
◇附属学校園全体の英語教育における幼児・児童・生徒への支援と英語教育の体制整備、推進、充実を図る。
◇異学校種間の英語教育のあり方に関し、地域のモデルとなる実践を行い、その周知を図る。

２　主な職務

◇附属学校園全体の英語教育における幼児・児童・生徒への支援・指導の充実に向けて大学教官と連携を図り、その機能・役割を踏まえた専門性を確保しながら体制整備を行う。
◇小学校での外国語科及び外国語活動の授業において、担任と連携した指導、補助を行う。
◇英語教育の充実、強化・高度化に対応した指導力向上プログラム等の開発や作成を行う。
◇附属学校園全体の英語教育とその支援・指導を行う教員として、幼小中一貫教育を支える。
◇附属幼稚園での英語遊び等を試行し、幼小連携による具体的な実践を促進する。
◇大学・学部等での研修を積極的に行い、英語教育コーディネータとしての資質向上を図る。

３　今年度（配置9年目）の基本的な考え方

【目　標】
◇学習指導要領に基づく外国語科及び外国語活動の指導充実と年間指導計画の策定・更新
◇附属中学校の英語科と小学校の外国語科及び外国語活動の接続に資する連携強化
【役　割】
◇学級担任やALTと連携し、外国語科及び外国語活動の時間を受け持ち、その充実を図る。
◇県や市の研修の講師として、地域の小学校の研究会・研修会等において指導・助言を行う。
◇附属幼稚園および附属小学校低学年の英語遊びの指導
◇附属中学校英語科の授業づくりへの支援（TTでの授業参加）
◇附属小学校外国語科及び外国語活動への中学校英語科教員の参加をコーディネートする。
【具体策】
◇高学年の外国語科および中学年の外国語活動を主に担当する。
◇低学年における英語遊びを複数回担当する。
◇附属幼稚園における年長児の英語遊びを複数回担当する。
◇附属中学校における英語科の授業に参加し、小中連携のあり方を探る。
◇学習指導研究協議会等において、外国語科及び外国語活動の授業を提案する。

４　今年度の成果（〇）と課題（▼）

〇公開研究会等を通じて、附属学校園における英語教育の取り組みを発信したり、ICTを効果的に活用した授業を具体的に提案したりすることができた。
〇ALTに加え、市の国際交流員や地域の方と連携した取り組みを進めたことで、話す楽しさを実感できる授業の展開につながった。
〇幼稚園と低学年での英語遊びの実践を通じて、幼から小（低学年）の連携モデルのあり方や、幼小中の12年間を見通したカリキュラムの構築について、これからの方向性をイメージすることができた。
▼子ども同士がつながる小中連携の単元を構想し、その具現化を図っていきたい。

令和5年度　附属学校園配置のコーディネータの成果と課題　その3

附属小校長　林　敏幸
教育情報化推進コーディネータ（附属小学校籍　教諭）　奥山　恭平

1　配置のねらい

附属学校園間の連携を強化し、円滑な接続と相互交流による一貫性の高い教育を行う。

◇小学校におけるICT教育の充実・強化、中学校におけるICT教育の高度化を目指し、教育情報化に対応した教育環境づくりを推進する。
◇附属学校園全体のICT教育における幼児・児童・生徒への支援とICT教育の体制整備、推進、充実を図る。
◇ICT教育のあり方に関し、地域のモデルとなる実践を行い、その周知を図る。

2　主な職務

◇附属学校園全体のICT教育における幼児・児童・生徒への支援・指導の充実に向けて関係機関と連携を図り、その機能・役割を踏まえた専門性を確保しながら体制整備を行う。
◇小学校でのICTを活用した授業を基盤に、担任と連携した指導、補助を行う。
◇ICT教育の充実・強化、高度化に対応した指導力向上プログラム等の開発や作成を行う。
◇附属学校園全体のICT教育とその支援・指導を行う教員として、幼小中一貫教育を支える。
◇外部での研修を積極的に行い、教育情報化推進コーディネータとしての資質向上を図る。

3　今年度（配置1年目）の基本的な考え方

【目　標】
◇附属学校GIGAスクール構想に基づいたICT活用の具体的指導および支援
◇校務DX化の推進とICTを活用した教員研修モデルの構築に向けた環境整備

【役　割】
◇小学校を起点に、附属学校園全体のICT教育の企画や運営を行う。
◇教員および児童・生徒に対し、ICT機器の活用に関する指導・助言を行う。
◇ICT活用の推進に向け、システムやネットワーク等の環境整備を図る。
◇教務主任や学年主任等と連携し、働き方改革につながる校務のDX化を具体的に行う。

【具体策】
◇教員および児童・生徒を対象に「ICTに関するアンケート」を年間2回実施し、結果に基づいてICT活用の推進に向けた方向性を整理する。
◇教員や児童・生徒の求めに合わせたICT活用について助言したり、効果的な活用のあり方を提示したりする。
◇「学びカフェ」の設計や導入する機材等を選定し、教員の研修の場を整備する。
◇校務のデジタル化を推進し、可能なことから順次整備する。

4　今年度の成果（○）と課題（▼）

○児童・生徒の情報活用能力の育成は年々進んできており、小学校ではICTの利便性を確認しつつ、情報モラルの重要性について高学年を対象とした授業を展開することができた。
○山形大学教員研修高度化事業の一環として、小学校に「学びカフェ」が設置された。それに伴い、教員がICTを活用しながら気軽に研修できる環境づくりを積極的に行うことで、教員の学びを広げることができた。
○これまで紙媒体で実施してきた様々なアンケートを見直し、Google フォームを用いたものに変更したり、校務のDX化を進めたりすることで働き方改革につなげることができた。
▼今後は、小学校での実践を附属学校園全体で共有するとともに、各校園の取り組みや課題について情報交換し、これからのICT教育の方向性を整理していく。

令和5年度　附属学校園「まつなみ学習支援室」の成果と課題

附属小校長　林　敏幸

1　設置のねらい

附属学校園間の連携を強化し、円滑な接続と相互交流による一貫性の高い教育を行う。

◇附属学校園全体の特別支援を必要とする幼児・児童・生徒への支援充実と体制整備の推進を図る。

◇附属学校園の特別支援教育並びに教育相談機能の一層の充実と活用を図る。

◇県内小学校の発達障がい児等通級加配校のモデルとなる研究・実践を積み重ねる。

2　主な職務

学級担任、各コーディネータ、SC（必要に応じて、中学校のSC及び大学の心理教育相談室のスーパーバイザー）、管理職（校長・教頭）と連携して主に以下の職務を行う。

◇学習面、生活面での支援（行動観察、TT指導、取り出し個別指導、諸検査の実施）

◇メンタル面での支援（教育相談、アドバイス等）

◇保護者との面談、教育相談

◇研修会等の周知・啓発活動の計画・実施

3　支援室の運営

【室　長】 小学校まつなみ支援室長　　長岡　初美　主幹教諭（附属小学校在籍）

【副室長】 特別支援教育コーディネータ　　藤本　沙織　教諭（附属特別支援学校在籍）

【メンタルケアコーディネータ】　　千葉　久美子　養護教諭（附属中学校在籍）

【支援員】 小学校まつなみ支援室支援員　　小林　明日香　支援員（週5日5h 勤務）

【スーパーバイザー】 佐藤　宏平氏（山形大学地域教育文化学部教授）

4　今年度の成果（〇）と課題（▼）

〇附属学校園間の情報共有が迅速かつ的確に図られ、特別な支援を必要とする幼児・児童・生徒への継続的な支援が充実してきている。

〇コーディネータが、幼稚園や小学校でのケース会議に参加して支援方法等を共に考えることで、園児と低学年児童への早期発達支援及び支援員の幼児・児童への継続的支援が有効に機能した。

〇室長とコーディネータ、支援員が日常的に情報交換を行うことで、個々の特性や状況に応じた支援を計画的に行うことができた。

〇個別の指導計画及び保護者の了解を得た教育支援計画に基づいて支援を行い、本人及び保護者の安心感・信頼感の醸成につながっている。

〇教員の特別支援教育についての理解が深まり、各学年・学級において特別な支援を必要とする幼児・児童・生徒への対応力が向上している。

〇室長とSCが連携して児童や保護者との面談を計画的に実施したり、授業の様子をもとに適切な助言を行ったりすることで、教員の安心感につながった。

▼今年度、特別支援教育コーディネータの小学校勤務が週1回となり、支援室登校児童への支援が中心となった。そのため、校内を巡回する時間の確保が難しくなり、課題や困難さを抱えた児童への支援を十分に行うことができなかった。

▼学校や学級への登校が難しい児童に対して、本人、保護者、学校が長期目標を共に考え、より充実した指導計画をつくっていく必要がある。

令和５年度の活動を振り返って

メンタルケアコーディネータ　千葉　久美子

1　活動報告

(1)特別支援教育コーディネータ及び附属小学校の教育相談担当との連携

・新入生の小学校時の生活の様子や人間関係，これまで行ってきた支援について情報提供をいただいた。

・小中学校に兄弟姉妹が在籍している生徒について必要に応じて情報交換を行った。

・中学校の生徒の様子について、必要に応じて情報提供を行った。

(2)附属幼稚園との連携

附属幼稚園養護教諭と情報共有したり、週2回幼稚園で勤務している支援員から情報を得たりして連携を行った。

(3)中学校スクールカウンセラーとの連携

・カウンセリング後、相談者から了解を得た内容を聞き取り，担任に伝達した。

・4月に中学１年生を対象にスクリーニングを実施。授業中の生徒の様子を観察し，生徒への支援方法について助言をいただいた。

・2名のカウンセラーから、以下の内容について、全クラスに講話をしていただいた。内容は「友だちの作り方」、「思春期の心について」、「ネットとの付き合い方」、「受験期の心の整え方」等

・Ｑ－Ｕアンケートの分析の学年会に入って頂き、捉え方や支援についてアドバイスをいただいた。

(4)中学校の学級担任・教科担任との連携

・「スズキ校務」を活用し、適宜、生徒の様子やカウンセリングの内容を記録し、担任や学年担任団に情報提供した。

・担任、学年担任団との情報交換を積極的に行い、今後の対応について検討した。状況に応じて校長や教頭に報告し，SCに繋いだりケース会議を開いたりした。

・担任会に参加し、Ｑ―Ｕアンケート結果を基に生徒の支援策について検討した。

・学級全体や特別な支援が必要な生徒への支援方法について確認し，指導にあたった。

・教室に入るのが難しい生徒に必要な学習支援について確認したり、授業に出られるような対応策を検討したりした。

・教育相談アンケートを受けて、生徒との面談を行った。

(5)教育相談部会の実施（中学校）

・年度当初に教育相談の年間計画を作成し，教育相談アンケートやSC講話やエン　カウンター（SGE）、ソーシャルスキルトレーニング（SST）などを計画的に実施できるようにした。

・部会を月2回設け，生徒の情報交換を行い，必要に応じて支援策の検討を行った。

・教育相談アンケートを年4回実施し，生徒の状況や悩みなどを把握し、必要に応じて面談等で対応するようにした。

・Q－Uアンケートを年2回実施し、分析方法を提供し，個々の対応につい検討した。
・全職員を対象に生徒理解研修会を実施した。今年度は山形大学附属特別支援学校 教頭 鈴木晶子先生から，「個別の教育支援計画及び指導計画作成を中心に、特別支援教育に関すること」についての講話をしていただいた。

(6)不登校生への対応(中学校)
・ケース会議を実施し，生徒の状況把握と対応策の検討を行った。
・担任と家庭訪問や電話で知り得た情報を共有し、対応策を検討した。

(7)学習室で過ごす生徒への対応(中学校)
・個別に月目標や具体的な取り組みを確認し，毎週，時間割を作成して目標に向かって学習できるように環境を整えた。
・必要に応じて生徒と面談を行い、心配事や困り事がないか確認しながら、適宜対応した。
・授業に入れるように教科担任と連携して学習支援を行うと共に，SGE、SSTを行い，人との関わり方について学ぶ機会を設定した。
・ICTを活用して生徒が学習室にいても授業に参加できるように環境を整えた。
・進路学習として、夏休みに、学習室の生徒と保護者を対象に不登校経験のある卒業生との交流を行った。
・山形大学の学生ボランティア20名の協力を得ながら、心理的支援及び学習支援を行うことができた。

2 成果と課題(成果○，課題△)
○小学校からの情報提供を基に、特別な支援が必要な児童・生徒の様子やその支援策について、理解を深めることができた。
○小中学校でつながりのある支援になるよう、特別な支援が必要な児童の保護者を対象に中学校の養護教諭と共に春休みに面談を行い、中学校進学に伴う心配事や困り事を聞いたり中学校への要望などを確認したりした。その後、面談内容について1学年の担任会で報告し、新入生の情報を共有することができた。
○中学校ではICTを活用して不登校生徒や学習室の生徒が授業や行事に参加することが可能となった。今後も担任や教科担任と連携して情報環境作りに努めていきたい。
○不登校経験のある卒業生との交流は今後の進路選択の参考になり、特に保護者に好評であった。
○学生ボランティアと学習室の生徒との関わりは心理的面と学習面双方で非常に効果的である。
△中学校の学習室を利用する生徒が増加したことで、生徒一人一人の学習進度や情報把握が煩雑になり十分に対応できないことがあった。今後、生徒一人一人が安心して学習室で過ごすことができたり、教室復帰につなげたりできるよう、関わりを工夫したい。
△小中学校のつながりのある支援をより一層充実させていく必要がある。高学年の児童とメンタルケアコーディネーターの関わる機会を増やすことで児童理解を深め、児童が中学校に進学した際，少しでも安心して学校生活が送れるように支援体制を整えていきたい。

令和５年度の活動を振り返って

附属学校特別支援教育コーディネータ　藤本沙織

１　主な活動の報告

（１）教育的支援

今年度も、幼稚園、小学校において、学級や個人に対する教育的支援を行った。

幼稚園では、年長の学級を中心に、気持ちの切り替えや友達との関わりに課題がある幼児に対する支援を行った。活動の流れや終わりの時間を視覚的に提示したり、集中できる環境を整備したりすることで、学年の活動に参加できるように支援した。友達とトラブルになった際は、気持ちを伝え合う場面を設定し、教師が言葉を補うことで、お互いの気持ちを適切な言葉で伝え合い、解決できるように支援した。各活動において、担任や養護教諭と活動内容を精選し、個別の目標とする姿や、そのための支援について情報交換を行ってきたことで、同じ視点で支援を行うことができた。

小学校では、支援が必要な児童に対して、それぞれの方法で支援を行ってきた。

教室での学習が難しい児童については、安心して過ごせる場として、まつなみ支援室に登校するようにした。それぞれ学習に取り組む時間に加えて、お互いに話をしたり、好きなことに取り組んだりする時間を設けることで、安心して登校できる日が増えている。また、１日の予定表を準備し、どこで何をするのか、自分で活動予定を考えて記入するようにした。１時間毎の過ごし方を考えることで、「この時間は教室に行く。」「まつなみでプリントをする。」等という計画を立て、それぞれの方法で学習に取り組む姿が見られた。

まつなみ支援室において、個別の指導も行ってきた。SST（ソーシャルスキルトレーニング）を行っている児童は、アンガーマネジメントや対人関係、社会生活を営むための技能について、指導計画を作成し、定期的に学習に取り組んだ。学習面での困難さを抱えている児童については、トランプやすごろく等の活動の中で、数量についての基礎的な概念や四則計算の学習に取り組んだり、実際のお金や時計を用いながら、生活につながる学習を行ったりしてきた。友達関係等についての不安を抱えている児童については、本人からの要望があった際に、本人の気持ちの聞き取りを行った。それぞれ、その日の学習内容や学習の様子を担任の先生に伝えたり、教室での学習の様子や課題として感じていることを聞き取ったりして、情報交換を行ってきた。

空き時間は、全体を巡回する時間を設け、授業の様子を見て、気になる児童について、担任と情報交換を行い、支援の方法について、一緒に考えてきた。

（２）ケース会や情報共有

幼稚園では、担任が課題を感じている幼児についてのケース会に参加し、個別の教育支援計画や指導計画の作成、それを受けての具体的な短期目標や支援方法等について一緒に考えてきた。また、定期的に開かれる「子どもを語る会」にも参加し、幼児の成長や課題を把握することができた。

小学校では、必要な児童についてケース会を行い、実態を共有し、支援方法につい

て検討してきた。個別の教育支援計画作成時は、担任と一緒に課題を整理し、支援方法や合理的配慮について、話し合う場を設定した。

幼稚園小学校共に、来年度以降の学びの場の検討が必要な幼児児童について、適切な学びの場や、そこに繋がるための今後の動き方等について、ケース会を行った。

（３）まつなみ学習支援室および支援員等との連携

幼稚園の保育支援は、支援員と中学校講師、附属学校特別支援教育コーディネータ３名が交代で勤務しながら行っている。

小学校においては、支援員と附属学校特別支援教育コーディネータが交代で勤務している。今年度は一緒に勤務する日がなくなったため、月に１回程度、打ち合わせの時間を設け、児童の様子についての情報共有、支援方法の検討を行っている。コーディネータや支援員の時間割を作成して教職員へ伝えており、担任はそれを見ながら、授業へのサポートや気になる児童の巡回などの要望を伝えてくださっている。また、スクールカウンセラーが児童や保護者との面談を行ったり、児童の授業の様子を見てアドバイスをしてくださったりしたことは、とても有意義だった。

（４）保護者支援

幼稚園は、１月に「小学校入学を見据えた子育て」というテーマで、年中児の保護者に向けてお話をさせていただいた。幼稚園での幼児の様子と、小学校１年生の姿を見ている立場として、これから身に付けたい力、そのための支援についてお話しすることができた。個別の支援が必要な幼児については、保護者面談に参加し、家庭や幼稚園での姿や具体的な支援方法の情報共有、関係機関の紹介、就学に向けての相談などを行った。

小学校では、取り出しの学習を行っている児童については、個別の面談に参加し、今後の目標や学習内容、支援方法等について検討した。

２　今後の取り組みと課題

（１）小学校での勤務が週１回となったが、取り出し学習や支援室登校児童への対応等で、全体を巡回する時間がなかなか取れなかった。学級の中で学習しているものの、学習や人間関係等について課題や困難さを抱えている児童について、少しでも困難さを減らし、それぞれの力を発揮していけるように支援していく必要があると考える。取り出し学習のねらいを明確にし、指導体制を検討することで、巡回時間の確保に努めていく必要があると考える。

（２）学校、学級への登校が難しい児童に対して、本人、保護者、学校が、一人一人の将来の姿を見据え、そのための長期目標を一緒に考えながら、指導方法を検討していく必要があると考える。支援室が、本人の不安感を受け止め、安心して過ごせる場となりながらも、今後、学校や社会の中でうまく生活していくためには、どのような力を、どのような方法で身につけていけば良いのかを考え、必要な学力や社会的スキル等を修得していくことができるように支援していく必要があると考える。

今年度の活動を振り返って

英語教育コーディネータ　　佐藤 大将

１　今年度の活動の報告

（１）小学５・６年生における「外国語科」の授業

今年度も、「外国語を通じて、自ら関わりながら相手や他者とつながろうとする子ども」の育成を目指し、子どもにとってコミュニケーションを図る必要感のある目的・場面・状況の設定について、新たな可能性を模索してきた。

６年生では、山寺外国語観光ガイド「Yamaderans（ヤマデランズ）」の代表を務める後藤麻衣さんをお呼びし、講話をいただいた。後藤さんが学生だった頃のことや、観光ガイドとして大切にしていることなどについて話していただき、外国語を学ぶ意義について考えることができた。山形のよさを外国語で伝え合う言語活動にも挑戦し、自分が知っている語彙や表現を使いながら伝えようとする姿が見られた。

（２）小学３・４年生における「外国語活動」の授業

今年度も、文部科学省作成の副読本「Let's Try!①②」を主な教材として扱いながら、「聞く」「話す」活動を中心に学習を進めてきた。５・６年外国語科、中学校英語科との系統性を意識しながら、コミュニケーション能力の素地を養うために、様々な言語活動に取り組んだ。

４年生では、山形市国際交流員のイ・サンホン先生を講師としてお招きし、韓国の言葉や文化について学ぶ活動を行った。この活動の様子をメディアにも取り上げていただき、県内外へ発信することができた。

また、１１月に行われた秋の研究協議会では、県内からコメンテーターの先生方をお呼びし、３年生外国語活動の授業を提案した。今後の外国語教育で大切にしていきたいことについて、中学校や大学の先生も交えて議論することができた。

（３）小学１・２年生における「英語遊び」

「幼小中の１２年間を見通した英語教育カリキュラム」の構築に向け、小学校低学年における「英語遊び」の授業を行った。子どもたちは、英語を使ったゲームや自己紹介などを楽しみながら、英語に慣れ親しむことができた。来年度も、３年生から始まる外国語活動とのつながりを意識しながら、指導内容やカリキュラムを更新していきたい。

（４）幼稚園における「英語遊び」

英語コーディネータが附属幼稚園を訪れ、年長組の子どもたちと一緒に「英語遊び」を行った。「遊びを通して英語に慣れ親しむ」をコンセプトに、幼稚園の子どもたちが、楽しみながら英語に触れることができるような活動を行った。簡単な英語を使いながら、自分の好きなものを友達と伝え合う活動を行った。

（５）中学校との連携

今年度も、コーディネータが中学生の授業に参加したり、共同研究協力者として授業研究会に参加したりすることを通して、小中連携の新たな可能性について話し合うことができた。このように、小中を通して目指す子どもの姿について議論し、授業を見合ったり、一緒に授業づくりを行ったりしていくことが、小中連携において極めて重要であると考える。そして、附属学校の小中連携の取り組みを、他校に広めていきたい。

２　成果（○）と課題（▼）

○　幼小中の１２年間を見通した英語教育カリキュラムの構築に向けて、附属中学校や附属幼稚園と連携した実践を行うことができた。また、小学校低学年の子どもたちとの「英語遊び」の授業も行うことができた。

○　ＡＬＴだけでなく、山形市の国際交流員や地域人材とも連携した実践を行うことができた。

○　Ｗｅｂ会議システムや学習アプリの活用、動画撮影など、ＩＣＴを効果的に活用しながら授業づくりを行うことができた。

○　公開研究会や各地区での講話などを通して、附属学校園における英語教育の取り組みを発信することができた。

▼　小中連携について、教員同士の連携に加え、子ども同士がつながることができる単元を構想し、その取り組みを他校に発信していきたい。

▼　幼稚園、小学校、中学校、特別支援学校の外国語担当教員で互いの授業を見合い、情報共有を図ることを通して、目指す子どもの姿を具体的にイメージしていきたい。

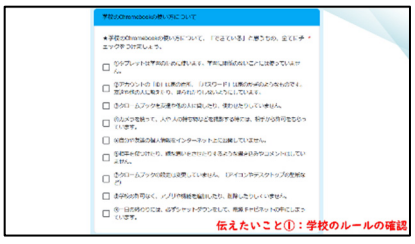
活動を振り返って

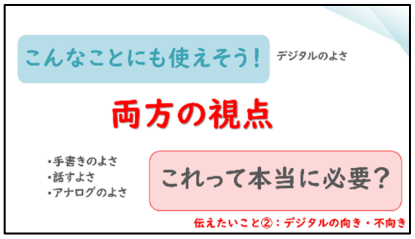
教育情報化推進コーディネータ　奥山　恭平

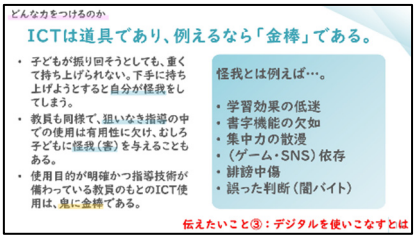
１　活動の報告

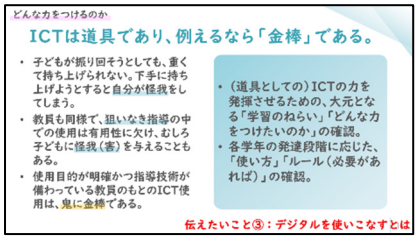
（１）児童に対するＩＣＴ活用の指導・助言

１０月上旬、６学年の児童でＳＮＳ内でのトラブルがあった。また、学習の中では何か分からないことがあるとインターネットで調べ、それで解決としていたり、「まとめ」としてドキュメントに打ち込むだけになっていたりする現状があった。それを受け小学校高学年を対象に、「ＩＣＴとの向き合い方」と題し講義を行った。ＩＣＴの利便性を認めつつ、それに伴う弊害も具体的に述べた。また、「どうしてクロームブックを使うのか。」と子どもに投げかけ、使用する際の目的に目を向けられるようにした。









（２）「学びカフェ」の設計や導入

山形大学教員研修高度化事業の一環で、附属小学校に「学びカフェ」を設置した。「学びカフェ」設置のねらいは、①学校マネジメント講座での「学校間ネットワーク」の利用（山形県教育センターの「学校マネジメント講座」で進める実践プランの進行に関わる相談やコメントに利用する。）②「ゆるやかで・密な」職員間のつながり（学年会・教科部会・研究部会等の職員会を、開けた空間でリラックスしながら協働的に進めていく。「学びカフェでやろう。」と、明るい声が聞こえる環境づくり）③「気軽に・すぐに」情報の受信発信ができる場に（オンライン環境が整っている場で、外部とつながり、学びが得られるようにする。「学びカフェでやろう。」と、気軽に手軽に使用できる環境づくり）である。写真のように、可動式テーブル、パーテーション、ホワイトボード、大型モニター、卓上モニター、ポータブルモニター、Wi-Fi ルーター、ノートパソコン等を新たに導入した。「学びカフェ」を設置することで、オンラインで外部と繋がり会議や学習活動プランの検討等をスムーズに行うことができた。

今年度「学びカフェ」が新設ということもあり、まずは「普段使い」という点で使用

してきた。ただし、「学校間ネットワーク」という観点からすれば、まだまだ実績は少ないため、山形大学・県センター・他学校等との接続の仕方に関して不透明な部分をクリアにしながら進めていかなければならない。

（３）教職員に対するＩＣＴ活用の助言や働き方改革につながる校務のＤＸ化

・アンケートのデジタル化

これまで紙媒体で行っていた「保護者向け・児童向け・教員向け 学校評価アンケート」「ＰＴＡ保護者奉仕活動アンケート」「保護者向け・児童向け いじめに関するアンケート」等をＧｏｏｇｌｅフォームを用いたアンケートに変更し、データの収集・取りまとめを行った。デジタルデータとして打ち込まれたものを自在にソートをかけることができ、観点に合わせて活用することができた。

・電子黒板やクロームブック、Google 各種サービスの活用法の周知

・ＨＰの更新

本校のホームページのこれまで行き届かなかった箇所の更新を行った。更新の際には、本校志願保護者・研究会参加希望者・在校生保護者等の閲覧者に向けてどのように発信すべきかという点、今後も持続可能な編集ができるかという点に配慮した。

２　課題と今後の取り組み

・　今年度は附属小内での活動が中心となった。学校園のコーディネータとして活動していくにあたり、各学校園での取り組みの視察や課題とされている事の吸い上げを行っていかなければならない。

・　２０１９年１２月に文部科学省が表明したＧＩＧＡスクール構想を受け５年が経つ。一人一台の端末がそろい、ＩＣＴはかなり身近になった。一方でハード面での更新方法や、いかに学習効果を上げる取り組みができるかという課題が挙がっている。さらに、文部科学省では２０２４年度からＩＣＴ教育を本格的に導入する方針を示している。これらを受け、附属学校園としてどのように取り組んでいくべきか整理し、指針を出していかなければならないと考える。

第２回幼小連絡会　報告

１　ねらい　　年長児の姿をもとに、架け橋カリキュラムデザインシートを使って話し合うことにより、子どもの育ち・学びについて共に考え、幼小のよりよい接続につなげていく。

２　日　時　　令和５年１１月２１日（火）

３　場　所　　山形大学附属幼稚園　遊戯室

４　参加者　　小学校・・・林校長・長岡まつなみ支援室長・芦野教務主任・鈴木養護教諭
　　１年生担任鈴木教諭・熊谷教諭　３年生担任後藤教諭
　　幼稚園・・・伊藤園長・伊藤教務・３歳児担任安藤教諭・４歳児担任逸見教諭
　　５歳児担任伊藤教諭・奥山養護教諭
　　特別支援コーディネータ・・・藤本教諭
　　山形大学・・・佐藤慎也教授

５　内　容　（１）幼稚園の保育参観　（9:00～13:30 に適宜）
　　（２）協議会　（16：00～17：00）
　　・５歳児の子どもの育ちについて（5 歳児担任より）
　　・架け橋カリキュラムデザインシートをもとにして、３グループに分かれて話し合いを行い、最後に各グループより話し合いの内容について発表しあった。

話し合いの様子（一部抜粋）
・素材の豊富さや遊びの場を意図的に残すことで、子ども達が遊びの中で自然に関わりをもち、自分たちで協同性を獲得していく姿が見られた。
・自由度の高い遊びの中で、自分の思いを伝え友達の思いを受け入れながら遊びを進める子ども達の姿が見られた。友達の言葉や行動に同調し、遊びが展開していく様子が見られ、言葉による伝え合いが活発に行われていた。
・途中から遊びに入る子どもを自然に受け入れてくれるなど、相手を否定しない関わりがうまくできていた。遊びの中で、友達との距離感を学び取っていると感じた。
・いざこざの中で、自分たちで折り合いをつけていく経験をたくさんさせたいと考えている。時には、保育者が間に入り子どもの思いを丁寧に橋渡ししながら、相手の気持ちや行動の意味を理解したり、自分の思いを伝えたりする経験を積み重ねてきている。この積み重ねから、子ども達は、友達関係を築く上での距離感を少しずつ身に付けてきていると感じる。

６　成果と課題
・参観する時間が異なることにより、それぞれが見た子どもの姿を共有するまでに時間がかかり、１０の姿をもとにして話し合いを進めることが難しい場面もあった。しかし、子どもの姿を時系列で追いながら共有し、１０の姿に照らし合わせて話し合いを進めていく中で､｢この言葉があったから､こういう協同性につながる姿になったんだね｣など、子ども理解を深めることもできた。
・幼稚園と小学校とが保育や授業の「子どもたちの姿」を一緒に見て１０の姿をもとにして語り合うことを通して、子ども理解を深めていきたい。また、スタートカリキュラムを共に作成していくなど、幼小連携を積み上げ充実させていきたい。

中学生による幼稚園運動会手伝い

１　ねらい

幼稚園：中学生のお兄さんやお姉さんに親しみと憧れをもつようになる。

中学校：幼稚園運動会ボランティアを通して、幼児との関わりを学び主体的に運営に携わる。

２　日時　　令和５年９月１６日（土）　８：３０～１２：００

３　場所　　附属幼稚園　園庭

４　参加者　ボランティア希望の３年生　　引率　教頭

５　内容　　競技の補助、道具などの準備、片付け

６　まとめ

＜中学校＞

○幼稚園の先生方が学年や園児たち一人一人の特性に応じた配慮をしながら接する姿から、細やかな気配りや先を見通して行動すること、事前にしっかりと準備することの大切さなどを学んだ生徒が多かった。

○元気で一生懸命に競技に取り組む園児たちと共に活動することは、幼児とのかかわり方を学ぶ貴重な体験であるとともに、幼少期からの自分の成長を振り返るよい機会となった。

＜幼稚園＞

○競技の最中に「がんばれ～！」「こっちだよ」など、応援してくれたり優しく言葉をかけてくれたりする中学生に親しみを感じている様子が見られた。

○中学生が競技運営に積極的に参加し俊敏に働く様子や、園児に対して優しく丁寧に接する姿は、幼稚園の保護者にとっても子どもの育ちの見通しとなり附属学校園としての連携を感じるよい機会となった。

園児と中学生の交流学習

1 ね ら い(中学校)

・幼児との遊びや会話等を通してふれあいの楽しさを味わい、幼児に親しみをもつことができる。

・幼児の興味・関心の傾向をつかみ、発達や年齢に合わせた接し方を考えることができる。

・自分を支えてくれた家族や身近な人たちの存在に気づくことができる。

2 日　　時　　令和5年11月27日(月)　9:00～　9:30(3年1組)
10:00～10:30(3年2組)
11月28日(火)　9:00～　9:30(3年3組)
10:00～10:30(3年4組)

3 場　　所　　山形大学附属幼稚園

4 参加生徒　　山形大学附属中学校　第3学年134名

5 活動内容

(1)幼児の年齢　幼稚園の3クラス(3歳児、4歳児、5歳児)に分かれて入り、交流した。

(2)遊びの種類　おままごと、折り紙、工作、ブロック、だるまさんが転んだ、絵本の読み聞かせ

(3)事前学習

①幼児の心身の発達について学習し、安全に楽しく交流するために必要なことを考えた。

②実習における自分自身の課題を設定し、学ぶ視点をもって実習に臨んだ。

③幼児と交流する際の約束や注意点を確認した。

6 成果(○)と課題(△)

○中学校で学んだことと実際の幼児の様子を重ね合わせて幼児との接し方を考えることができていた。

○安全に配慮して学習することができた。交流後、幼稚園の先生方から生徒の様子をお聞きし、事後指導に役立てることができた。

○幼稚園の複数のクラスで活動した生徒は、異年齢の発達の特徴を比較して様々なことに気が付き、学んでいた。

△幼稚園での中学生の人数配分や動線を工夫し、より安全で充実した時間にしたい。

附属中学校授業・部活動参観

1　ねらい　　６年生の児童が附属中学校の学習を参観したり部活動を見学したりすることで、中学校生活に対する心配や不安を軽減し、中学生活への期待をもつこができるようにする。

2　日　時　　１０月２５日（水）　※詳細は附属中学校の計画による。

１４：１０　　附属中体育館に整列

１４：２０～１５：１０　授業参観

１５：２０～１６：００　部活動見学

１６：００　終了

3　６年児童の動き

１４：００　附属中学校へ移動

１４：１０　体育館に整列

１４：２０～１４：４５　学級ごとに全クラスを回る。

１組　１学年　→　２学年　→　３学年

２組　２学年　→　３学年　→　１学年

３組　３学年　→　１学年　→　２学年

１４：４５～１５：１０　自分の参観したい授業場所に行き、参観する。

１５：２０～１６：００　部活動見学　自分の興味のある部活動を見学する。

１６：００　中学校昇降口付近に集合　小学校に戻る

幼稚園と特別支援学校小学部の交流及び共同学習

1　ねらい

幼稚園

特別支援学校の友達や先生と一緒に遊び、親しみをもつようになる。

特別支援学校小学部

(1)友達と活動する中で、他者と活動を共にする楽しさや自分の役割などが分かる。

(2)友達と関わる中で、伝え合ったり好きな活動を共にしたりして活動する。

(3)様々な活動を通して、相手とよりよく関わりながら、活動しようとする。

2　参加者

幼稚園　主に年長児　２８名

特別支援学校　小学部１組（１、２年）児童　５名

3　日時、場所、内容

	日　時	場　所	内　容
第１回	令和５年６月２２日（木） １０：００～１１：１５	特別支援学校	「ともだちといっしょにあそぼう①」 ・自己紹介 ・園庭での自由遊び
第２回	令和５年９月２０日（水） ～２２日（金） １０：００～１１：１５	幼稚園	「ともだちといっしょにあそぼう②」 ・学習発表、遊びの紹介、ダンス、園庭遊び、感想発表　など
第３回	令和６年２月　７日（水） ～９日（金） １０：００～１１：１５	幼稚園	「ともだちといっしょにあそぼう③」 ・学習発表、遊びの紹介、ダンス、雪遊び、感想発表　など
事前事後の学習	＜幼稚園＞ ・特別支援学校の友達からの動画メッセージをみんなで視聴し、どんなことをして一緒に遊びたいかを考えたり、交流の際に遊んだことを思い出したりして、期待感が高まり、交流への見通しがもてるようにした。 ・保育者や友達と一緒に特別支援学校の友達と遊んだことを話し合ったり、写真を見ながら一緒に遊んで楽しかったことを思い出したりして、うれしかった気持ちや次回への期待を手紙で伝えるようにした。 ＜特別支援学校小学部＞ ・事前学習では、昨年度や前回の交流の様子を写真で見ながら、活動について見通しを持つ学習を設定した。また、幼稚園の友達に、動画のメッセージを送ったり、交流の活動内容を伝えたりする活動を設定して、交流学習への期待を高めるようにした。 ・事後学習では、写真や動画を見ながら、交流学習の様子を振り返り、幼稚園の友達に向けて手紙を書いて自分の気持ちを伝えるようにした。		

４　成果（○）と課題（▼）

幼稚園

○最初の顔合わせの会で、特別支援学校の児童が自己紹介をしてくれたことにより、遊びの中で交流の手助けとなった。また、小麦粉粘土や箱遊びなどができる楽しい場があったので、自然に遊びに入ることができていた。

○２回目の交流時に、「（特別支援学校のお友達の）名前、忘れちゃった」と言う園児がいた。前回の交流での楽しかったことを思い出し、また一緒に遊びたいという関心の表れでもあると感じた。「もう一度名前を教えてください」とお願いをして、心の距離が縮まったように感じた。

○始まりの会で特別支援学校の友達から紹介してもらったゴムのおもちゃに、関心を示していた。会の後の遊びでは、そのおもちゃを見ながら材料を集め、自分でもつくり始める園児が数名いた。できあがると、喜んで特別支援学校の先生に見せに行き、先生の近くにいた特別支援学校の児童にも見せる姿が見られた。すぐに直接の交流になるわけではないが、モノを介して、先生を介して、幼稚園の園児と特別支援学校の児童の交流が生まれる様子が見られた。

▼一緒に同じ場にいて、同じような遊びをしているが、もっとお互いにやりとりが生まれるようなしかけをしていくことも必要だと思われる。

特別支援学校小学部

○第１回目は、特別支援学校に幼稚園児が訪問して交流学習を実施した。交流の始まりに会を設定して、自分の名前や好きなことを紹介し合った。また、生活科で学習した小麦粉粘土や箱を使って活動することで、活動を通して作っているものを伝え合ったり教師が仲立ちしたりして一緒に活動する様子が見られた。

○第２・３回目は、幼稚園に行って三日間交流会を実施した。始まりの会では、生活科で作ったゴムのおもちゃを披露してプレゼントした。園庭や園内の活動では、園庭の築山や段ボールなどを通して、友達の遊びを参考にしたり自分で遊び方を工夫したりして、見立て遊びや体を動かす遊びをして幼稚園の友達と自然に関わり合って交流する場面も多く見られた。

○今年度は、交流学習に加えて共同学習の視点から、生活科で取り組んだ内容を取り入れて学習内容を紹介したり、一緒に活動したりした。そのことで、自分たちがしている学習を伝えながら深めたり、新たな遊び方を広げたりすることにつながった。

▼児童によっては、自分の興味で活動し、交流の活動になりにくい場面も見られた。また、教科等のねらいにつながる共同学習の視点をより広げられるとよい。異学年、異校種の集団との交流の在り方についても検討し、早期の段階からインクルーシブ教育についての経験を重ね効果的な交流及び共同学習となるように計画したい。

小学校と特別支援学校小学部の交流及び共同学習

1　ねらい

小学校

附属特別支援学校の友達と共に活動する中で、気持ちや考えを感じ取ろうとしたり、伝えたりすることを通して、相互理解の素地を育てる。

特別支援学校小学部

（１）附属小学校の児童と活動し、活動を共にする楽しさや活動に必要なことが分かる。

（２）附属小学校の児童に気持ちや考えを伝え合って、選択や決定をしながら共に活動する。

（３）附属小学校児童と様々な活動を通して、相手とよりよく関わりながら、自分の考えを深めようとする。

2　参加者

小学校　３年児童（１～３組）　９８名

特別支援学校　小学部２組（３・４年)、３組（５・６年）児童　１１名

3　日時、場所、内容

	日　時	場　所	内　容
1回	５月３０日（火） 10:25～11:40	特別支援学校	ダンス、ゲーム、にじみ絵など特別支援学校が企画した活動（３年１組と）
2回	６月２０日（火） 10:30～11:30	小学校	まとあて､ボウリングなど３年１組児童が企画した活動
3回	１０月　５日（木） 10:25～11:40	特別支援学校	ダンス、貼り絵、にじみ絵など特別支援学校が企画した活動（３年３組と）
4回	１１月１３日（月） 10:30～11:30	小学校	粘土､リズム活動など３年３組児童が企画した活動
5回	１１月２８日（火） 10:25～11:40	特別支援学校	ダンス、貼り絵、にじみ絵など特別支援学校が企画した活動（３年２組と）
6回	１２月１２日（火） 10:30～11:30	小学校	創作パフェ、スノードームなどの制作活動、活動など３年２組児童が企画した活動
事前事後の学習	＜小学校＞ ・事前学習において顔写真を共有し､自分たちが一緒に活動する友だちがどのような人なのかを確認した。（１回目）また、Google　meet で教室をつなぎ、当日の活動内容紹介などを行った。（１回目及び２回目） ・活動後は振り返りの時間を設け、学びを自覚できるようにした。 ＜特別支援学校小学部＞ ・事前学習では､同じグループの友だちの名前と顔写真を見て確認したりオンラインで自己紹介したりした。オンラインで活動内容を紹介し合い、見通しを持てるようにした。 ・事後学習では、写真で振り返り、楽しかったことをまとめたり、手紙を書いたりして気持ちを表した。		

４　成果（○）と課題（▼）

小学校

○実際に対面した際には、初めは少し緊張も見られた様子だったが、事前学習で顔写真を見ていたこともあってか、すぐに打ち解け、自分から声をかけて活動を進めようとする子が多くいた。

○２回目の活動では、「何かをしてあげる」でなく、「一緒に活動する」という意識が子どもたちに働いていた。計画を立てる際も、「附特の人たちとこんなことをしたら楽しめるかな。」という相手意識をもって行動する姿が見受けられ、教師が声掛けや指示を出さなくとも、子どもがインクルーシブの意識をもっていることを感じ取ることができた。

○今年度は児童が考えた活動以外に、音楽担当教諭と協力し、小学校で一緒に音楽の授業を受けた。小学校の子どもたちが普段授業の導入で行っているリズム遊び「三時のおやつ」を一緒に行うなど、隔たり無く共に学ぶことができた。

○小学校での学習では、特別支援学校の小学部２組・３組の児童を３年、４年、５年、６年と学年別に分けて附属小学校の児童と小グループにしたことで、より関わりやすさが感じられたようだった。

▼１０月末は小学校でインフルエンザの罹患が拡大し、交流が延期になる、参加児童が少なくなる、などの事態が起こり、特別支援学校側から臨機応変に日程変更をしていただいた。欠席してしまうと１回の交流のみになってしまうなど、回数が少ないことによるデメリットも見えた。

※今年度は複組がなくなり、第３学年が実施したことで各学級２回の交流のみとなった。学級の人数も多い中で、来年度はどういった形で交流をしていくのか模索していきたい。

特別支援学校小学部

○全６回の交流会の計画で、小学校１～３組と各２回ずつ活動した。会場を１回目は特別支援学校で２回目は小学校で実施した。また１学級を４グループに分かれて活動することで、名前を覚えたり次回の交流への期待を高めたりして、より相手を意識して活動できた。

○レクリーション活動にとどまらず、貼り絵やにじみ絵など制作活動も取り入れたことで、交流の意味合いだけでなく、図画工作や音楽など教科の視点で共同学習を意識して活動できた。附属小学校での活動では、音楽専科の教員が実際に授業をし、演奏会のような活動となり、貴重な経験となった。

○ＩＣＴ機器を活用して、事前学習では、オンラインにて直接やり取りをしたことで、グループの友達や活動内容をあらかじめ知ることができた。そのことで、直接の交流会では、相手を意識したり見通しを持ったりして活動できた。

▼３年生全学級との交流となったため、１学級とは２回のみの活動となり、相手との関わりを十分に深めることが難しいこともあった。また、特に３組（５・６年）児童にとっては、年齢差もあったため、生活年齢が近い学年との交流もできるとよい。インクルーシブ教育への理解を深め、共生社会につながるよう効果的な交流の在り方を双方で検討して計画していきたい。

【中・特連携：交流及び共同学習】

附属中学校と附属特別支援学校中学部の交流及び共同学習

１　ねらい

中学校

（１）附属特別支援学校の生徒と活動する中で、障害のある生徒達への理解を深め、社会で共に生きる一員として互いを認め合い支え合う気持ちを育てる。

特別支援学校中学部

（１）附属中学校の生徒と活動する中で、相手のことを知ったり、活動を共にする楽しさや必要なことが分かったりする。

（２）附属中学校の生徒と気持ちや考えを伝え合って、共に活動する。

（３）附属中学校の生徒と様々な活動を通して、相手とよりよく関わりながら、自分の考えを深めようとする。

２　期　日　　令和５年１２月５日（火）、１４日（木）１０：５０～１１：４０

３　場　所　　附属中学校　六稜ホール及び体育館

４　参加生徒　　中学校　２年生　生徒　　１３３名

特別支援学校　中学部生徒　　１４名

５　活動内容

事前事後の学習	＜中学校＞ ・事前学習で、特別支援学校の自己紹介の動画を視聴し、特別支援学校の生徒とかかわるために、どのようなことができるかを考え、学校紹介のＶＴＲを作成したり、レクレーションの内容を話し合ったりした。 ・事後学習では、活動を通して学んだことをふり返りシートにまとめた。 ＜特別支援学校中学部＞ ・事前学習として、附属中学校の生徒のことをより知るためには、どのようなことができるかを考える時間を設定し、生徒からの意見を基に自己紹介動画の作成やグループでレクリエーションを行うことを提案した。そして、お互いに動画を視聴し、交流学習への期待感を高めた。また、交流学習で、どのように関わりたいか目標を明確にして臨んだ。 ・事後学習では、グループでの活動を通して見つけた相手の良いところを振り返りシートにまとめ、附属中学校の生徒と共有した。
当日の学習	前半＝中学生が考えたレクリエーション １回目（１・２組）は「フルーツバスケット」「じゃんけん列車」「王様じゃんけん」 ２回目（３・４組）は「新聞じゃんけん」「ふうせんしりとり」 後半＝特別支援学校の生徒が準備したボール運びリレー

6　成果（○）と課題（▼）

中学校

○今回は、学年全体で交流学習を行うことができた。障害のある生徒や多様性を理解する貴重な機会となったと感じている。昨年度、交流会を経験したことのある生徒がいたことが、どのような活動内容にすると支援学校の生徒たちが楽しんでもらえるかということをイメージしながら話し合いを進めることにつながっていた。

○交流活動を通して、主体的に関わろうとする姿や最後まで頷きながら話に耳を傾けようとする姿が見られ、様子をよく観察したり、言葉を選びながら話したりしている姿勢から、相手のことを考えて行動しようとする意思を感じた。附特の生徒との関わりから、様々な違いや個性を感じるとともに、自分自身を深く見つめ直すきっかけにもなったのではないかと思う。今回のような経験の積み重ねが人との付き合い方の学びとなり、今後の社会生活にも繋がっていくことが期待できる。

▼１学級のみだった交流を、学年全体に広げ、共生社会に対する意識を育てたいと考えた。人数に差があるため、どのような活動が最善なのか難しさを感じたが、学年全体で実施できたことはよかった。ただ、このままだと一過性の取り組みだと感じている。「障害について理解するための講話」「中学生が支援学校を訪問する」など、中学生活３年間でどのように系統立てたプログラムを作成していくかが、今後の課題ではないかと考えている。

特別支援学校中学部

○同世代の生徒がたくさんいることを知ったり、活動を通して関わったりするねらいから、自己紹介をしたり、グループで協力して行うレクリエーションを行ったりした。今年度も小グループで活動したことで、同じグループの友達の名前を覚えたり、自分から話しかけたりするなど、友達に関心を持ち、昨年度よりも主体的に関わる姿が多く見られた。

○事前学習でお互いを知る機会を設けたことで、より期待感を持って交流学習に臨み、複数回交流することで、見通しを持って活動に取り組んだり、たくさんの友達と関わったりすることができた。

▼年度初めに交流及び共同学習のねらいについて、双方で確認はしたが、活動内容や活動時期を年度途中に検討する難しさを感じた。今後、お互いの生徒にとって経験を広げたり、社会性や豊かな人間性を育んだりすることのできる交流及び共同学習にしていくための学習集団や活動内容、活動時期や回数を今年度のうちから検討し、次年度に以降生かしたい。

Ⅱ　山形大学附属学校
研究・連携推進委員会規程

○山形大学附属学校研究・連携推進委員会規程

平成28年4月1日

（設置）

第1条　山形大学附属学校運営規程第8条の規定に基づく附属学校運営会議の専門委員会として，山形大学附属学校研究・連携推進委員会（以下「委員会」という。）を置く。

（目的）

第2条　委員会は，附属学校における研究を推進し，かつ，附属学校間の連携を推進することを目的とする。

（審議事項）

第3条　委員会は，次に掲げる事項を審議する。

(1)　大学と各附属学校とが連携した教育研究及び実証の推進に関する事項

(2)　公開研究会及び大学と各附属学校との共同研究に関する事項

(3)　附属学校間の連携の基本的方針に関する事項

(4)　附属学校合同研修会に関する事項

(5)　幼小連絡会及び小中連絡会に関する事項

(6)　その他前条に規定する目的を達成するために必要な事項

（組織）

第4条　委員会は，次に掲げる委員で組織する。

(1)　附属学校運営部長

(2)　附属学校運営副部長（研究担当）

(3)　附属学校運営副部長（教育実習担当）

(4)　主担当教員として地域教育文化学部に配置された教員の中から選出された者　3人

(5)　主担当教員として大学院教育実践研究科に配置された教員の中から選出された者　1人

(6)　附属学校の校長（幼稚園にあっては園長。以下「附属学校長」という。）

(7)　附属学校の教頭

(8)　各附属学校研究部長

(9)　その他委員会が必要と認める者

2　前項の第4号，第5号及び第9号に掲げる委員の任期は，2年とする。ただし，委員が欠けた場合における補欠の委員の任期は，前任者の残任期間とする。

（委員長）

第5条　委員会に委員長を置き，前条第1項第1号に掲げる委員をもって充てる。

2　委員長は会務を掌理し，委員会を代表する。

3　委員長に事故があるときには，前条第1項第2号に掲げる委員がその職務を代理する。

（会議）

第6条　委員会は，委員長が招集する。

2　委員会は，委員の過半数が出席しなければ，会議を開き，議決することができない。

3　委員会の議事は，会議に出席した委員の過半数で決し，可否同数のときは，委員長の決するところによる。

4　前項の場合において，委員長は，委員として議決に加わることができない。

5　委員長は，審議結果を山形大学附属学校運営会議に報告しなければならない。

（部会）

第7条　委員会の下に，次の3つの部会を置く。各部会の運営に関し必要な事項は，別に定める。

(1)　共同研究推進部会

大学と附属学校の共同研究について計画し，実施する。

(2)　幼・小・中連携部会

附属幼稚園，附属小学校及び附属中学校の連携について計画し，実施する。

(3)　特別支援連携部会

附属特別支援学校とその他附属学校の連携について計画し，実施する。

（事務局）

第8条　委員会に事務局を置く。事務局は各附属学校の教頭が持ち回りで担当し，委員会運営に必要な庶務を行う。

（その他）

第9条　この規程に定めるもののほか，委員会の運営に関し必要な事項は，委員会が定める。

附　則

1　この規程は，平成28年4月1日から施行する。

2　次の規則は，廃止する。

(1)　山形大学附属学校研究推進委員会規則（平成17年3月7日制定）

(2)　山形大学附属学校連携委員会規則（平成21年6月1日制定）

Ⅲ　資　　料

山形大学附属学校研究・連携推進委員会規程第７条に定める部会に関する申合せ

平成 31 年 4 月 24 日
附属学校研究・連携推進委員会

１　目的

この申合せは，山形大学附属学校研究・連携推進委員会規程第７条に定める「共同研究推進部会」，「幼・小・中連携部会」及び「特別支援連携部会」の各部会の運営について，必要な事項を定めるものとする。

２－１　共同研究推進部会

⑴ 大学と附属学校の共同研究を推進することを目的とし，大学教員及び附属学校教員で構成する。

⑵ 共同研究推進部会は，次の研究部会で構成する。

国語教育	社会科教育	算数・数学教育
理科教育	音楽教育	造形美術教育
保健体育教育	家政教育	外国語教育
幼児教育	道徳教育	生活科教育
特別支援教育	養護	学校外教育
ＩＣＴ教育	インクルーシブ教育	英語教育
ＳＤＧｓを踏まえた教育		

⑶ 研究部会への所属については，原則として年度初めに附属学校研究・連携推進委員会において確認する。所属確認は，附属学校教員または大学の同部会員の推薦と本人の同意に基づいて行う。

⑷ 地域教育文化学部及び教育実践研究科の教員はいずれかの研究部会に積極的に所属するものとする。附属学校教員は，原則としていずれかの研究部会に所属するものとする。地域教育文化学部以外の教員についても，研究部会員の推薦に基づいて研究部会に所属することができる。

⑸ 各研究部会は２人以上で構成し，各研究部会に大学教員の中から選出した部会長１人を置く。
ただし，ＩＣＴ教育，インクルーシブ教育，英語教育及びＳＤＧｓを踏まえた教育の研究部会にあっては，附属学校教員の中から選出した部会長１人を置くものとする。

⑹ 研究部会の設置及び改廃等に関する事項は，附属学校研究・連携推進委員会において決定する。

⑺ 各研究部会は，年度当初に研究テーマを決定の上共同研究を行い，年度末に附属学校研究・連携推進委員会に研究結果報告を行うものとする。各研究部会の研究テーマは，各附属学校の公開研究会のテーマと関連した研究テーマや，他の主体的研究テーマとする。

⑻ 研究部会に所属する大学教員は，各附属学校の公開研究会において，指導助言者ではなく，共同研究者として積極的な役割を果たすものとする。

２－２　幼・小・中連携部会

⑴ 附属幼稚園，附属小学校，附属中学校の連携について具体的に計画し，実施することを目的とする。

⑵ 幼・小・中連携部会は，附属学校運営副部長（２人），学部選出の研究・連携推進委員会委員（１人），幼・小・中の各教務主任（３人），コーディネータ（４人），各研究部長（４人）で構成する。
※座長は，研究担当の附属学校運営副部長が務める。

⑶ 部会の開催は，議題に応じて，次の方法のいずれかとする。

(a) 研究・連携推進委員会と同日開催（研究・連携推進委員会終了後に開催）

(b) 研究・連携推進委員会と別の日に開催（幼・小・中連携部会＋特別支援連携部会の連続開催）

(c) 研究・連携推進委員会と部会の合同開催

⑷ 附属小学校を主幹校とし，作業部会の議題の整理，会議の案内，進行等を務めるものとする。

２－３　特別支援連携部会

⑴ 附属特別支援学校と幼・小・中との連携について具体的に計画し，実施することを目的とする。

⑵ 特別支援連携部会は，附属学校運営副部長（２人），学部選出の研究・連携推進委員会委員（１人），幼・小・中・特の各教務主任（４人），コーディネータ（４人），各研究部長（４人）で構成する。
※座長は，研究担当の附属学校運営副部長が務める。

⑶ 部会の開催は，議題に応じて，次の方法のいずれかとする。

(a) 研究・連携推進委員会と同日開催（研究・連携推進委員会終了後に開催）

(b) 研究・連携推進委員会と別の日に開催（幼・小・中連携部会＋特別支援連携部会の連続開催）

(c) 研究・連携推進委員会と部会の合同開催

⑷ 特別支援学校を主幹校とし，作業部会の議題の整理，会議の案内，進行等を務めるものとする。

附　則

この申合せは，平成 31 年 4 月 24 日から施行する。

附　則

この申合せは，令和 4 年 4 月 1 日から施行する。

附　則

この申合せは，令和 5 年 6 月 7 日から施行し，令和 5 年 4 月 1 日から適用する。

山形大学附属学校研究・連携推進委員会委員名簿

（令和５年４月１日現在）

	氏　　名	現　　職
委員長（１号委員）	三　浦　登志一	（附属学校運営部長）
委　員（２号委員）	笹　瀬　雅　史	（附属学校運営副部長）
委　員（３号委員）	加　藤　健　司	（附属学校運営副部長）
委　員（４号委員）	佐　川　　馨	（地域教育文化学部教授）
	坂　本　明　美	（地域教育文化学部准教授）
	坂　喜　美　佳	（地域教育文化学部准教授）
委　員（５号委員）	石　﨑　貴　士	（大学院教育実践研究科教授）
委　員（６号委員）	伊　藤　顕　吾	（附属幼稚園長）
	林　　敏　幸	（附属小学校長）
	森　本　真　紀	（附属中学校長）
	川　田　栄　治	（附属特別支援学校長）
委　員（７号委員）	西　長　　大	（附属小学校教頭）
	斎　藤　善　行	（附属中学校教頭）
	鈴　木　晶　子	（附属特別支援学校教頭）
委　員（８号委員）	伊　藤　真由美	（附属幼稚園研究主任）
	神　保　諒　一	（附属小学校研究部長）
	大　隅　一　浩	（附属中学校研究部長）
	柴　田　雄一郎	（附属特別支援学校研究主任）
委　員（９号委員）	伊　藤　恵里奈	（附属幼稚園教務主任）
	芦　野　繁　樹	（附属小学校教務主任）
	金　澤　彰　裕	（附属中学校教務主任）
	近　藤　真知子	（附属特別支援学校教務主任）
	藤　本　沙　織	（特別支援教育コーディネータ）
	千　葉　久美子	（メンタルケアコーディネータ）
	佐　藤　大　将	（英語教育コーディネータ）
	奥　山　恭　平	（教育情報化推進コーディネータ）

※４号，５号及び９号委員の任期は２年（R4.4.1～R6.3.31）

編集後記

今年度、ようやくコロナウイルス感染症が５類に引き下げられた。そのため、昨年度まで中止や縮小をした余儀なくされていた活動も、少しずつではあるがコロナ前に戻り、充実した連携活動になったようである。

また、附属学校園の第４期中期目標・中期計画の柱となる４つのプロジェクトチーム（ＩＣＴ活用、インクルーシブ教育、英語教育、ＳＤＧｓを踏まえた教育）の充実を図った１年ともなった。来年度は、今年度の課題を修正し、更に充実した取り組みとなるようにしたい。

今後も、幼小中特の４つの校種を持つ附属学校園の強みを生かし、附属学校の子どもたちに未来につながる学びを提供するとともに、地域にとって意義ある教育実践を提案していきたい。

令和５年度　附属学校研究・連携推進委員会事務局
附属中学校 教頭 西長　大

令和５年度

附属学校連携活動報告書

発行日 令和６年３月３１日

発行者 山形大学

編集者 山形大学附属学校連携委員会

〒９９０－００２３

山形市松波２丁目７番２号